

錢穆の香港残留について（1949-1967年）

About Dr.Qianmu remains on Hong Kong (1949 to 1967)

于蕙清、潘江東、紙矢健治

分野別：歴史学（アジア）

キーワード：錢穆、新亞書院、香港中文大学、香港残留

1.はじめに

2006年、『新亞書院55周年記念文集-誠明古道照顔色』が香港中文大学から出版された¹⁾。錢穆（1985-1990）らがつくった新亞書院は、すでに63年以上の歴史を持つ。香港中文大学設立が50年前の1963年であるから、新亞書院は、それより13年も早く設立された。筆者は、香港中文大学中国研究服務中心の『民間歴史』で、81人の中央研究院「院士」のうち60人が、1949年秋の国民政府（以下、国府と略す）台湾撤退に随行できなかったことを知り、衝撃を受けた。中央研究院は1928年に、当時の首都だった南京に設立され、今は台北市にある総統府直轄のシンクタンクである。生命科学、数理科学および人文社会科学の分野まで含む分野の国内最高の研究機関として現在まで、その歴史を刻み続けてきた。錢穆も台湾へ行けなかった一人であった。錢穆は、香港に「残留」を余儀なくされ、じつに1949年6月から1967年10月までの長きにわたり香港に身をおいた。錢穆は、胡適と並び称せられる歴史家であったが、台湾には行けず、国府撤退とともに香港に流れ込む青年たちの教育のため、あるいは香港での中華文化の教育をはかるため、1949年秋、新亞書院の前身である亞洲夜間書院を創設し、翌1950年に新亞書院を九龍桂林街の雜居ビルにつくった。それから56年という年月が経ち、ようやくその香港中文大学から錢穆を記念する文集が出版されたのであるが、筆者にとっては、錢穆と新亞書院の関係を思うとき、深い感慨に浸らざるを得ない。今で

1) 周君廉基金の補助により新亞書院から出版された。

は、その香港中文大学は『The Times Higher Education World University Rankings 2013-2014』によると世界ランキング第109位。香港では、香港大学（第43位）と香港科技大学（第59位）に続き第3位の評価である²⁾。その一翼を担った、あるいは中華文化教育を香港で行おうとした人物の中で、もっとも影響力を持った銭穆が、どのような事情で、または思いで、台北に赴けず、香港にとどまり14年間をかけ、この新亜書院を創立したのか、筆者は、その理由を明確にする時がおとずれたと確信し、このことを本稿で書き記すことを決心した。

2. 香港中文大学新亜書院と銭穆

2.1 新亜書院について

専攻研究を述べる前に、まず、香港中文大学と銭穆の関係について申し述べなければならない。

香港には現在10の公立大学、5の私立大学がある³⁾。1983年に香港理工学院と香港城市大学が設立されるまで、香港の大学は香港大学と香港中文大学の2校だけであった。この他に、師範学院や工業学院は存在していたが、大学教育としては、戦後、長い間、これら2校は絶対的な存在として、最難関大学としての座を保ち続けた。

香港中文大学は、1963年10月に設立された総合大学である。英連邦にひろくみられるような、緩やかなカレッジの集合体として大学を構成する「連邦制大学」として設立され、聯合書院、崇基書院、そして新亜書院から成ったのである。その一つ、聯合書院は国府系のカレッジが離合をして成立し、もう一つ、崇基書院はキリスト教会系として香港にあった⁴⁾。その後、香港政庁は香港中文大学の運営に対し、公営大学たる教育政策を直接反映させるこ

2) The Times Higher Education World University Rankings 2013-2014

3) 中華人民共和国香港特別行政区政府教育署ホームページ

4) 教育部編印『公私立大学校院一覽表』台北：教育部、1991年初版、p134-135。1948年12月に創設された中華文法学院が中心となり、広僑学院（1955年設立）、華僑工商学院（1953年12月立案を復活）、光夏学院、平正学院などが合併し、1956年、私立聯大大学院を形成したが、その後、華僑工商学院、光夏学院、平正学院が離脱した。

2013年12月 于蕙清・潘江東・紙矢健治：錢穆の香港残留について（1949-1967年）

とを目的に、ゆるやかな連邦制から校長の権限に集中する「単一制」へ改革した。このプロセスに錢穆らが反発したのである。

2.2 香港の国府系カレッジの存在について

そもそも1949年10月の中華人民共和国の成立の前後において、香港にのがれた国府系カレッジ（書院）は、1991年時点で13校にもおよんだ⁵⁾。書院とは、カレッジをあらわす。香港教育例則では、国府系カレッジは、一律に書院と呼ばれた。実際には、大学として機能していた。国府側の行政院（内閣）教育部（省）高等教育司（第2科）によって、教育部が授与する学位として、国際的な認証を得た。1997年7月、英領香港は中華人民共和国香港特別行政区へとかわるが、中華人民共和国政府（以下、中国と略す）が、国府側の発行する学位を全面的に承認する政策をとっていたので、そのカレッジの地位は、香港の返還後に一時、淘汰されたカレッジは出たものの保たれることとなった。新亜研究所や珠海学院など国際的に承認される大学（大学院）以外にも、仏教系の能仁書院が残り、いずれも総合大学への規模拡大を目指している。国府系以外のカレッジには、国府に属さない中国系の樹仁学院が著名であり、近年、香港樹仁大学となり、香港初の私立大学として、その存在を強化しつつある。

2.3 中央研究院について

中央研究院は、国府の総統府直轄のシンクタンクである。設立は早く、1948年3月には、「院士」81人を選出し、第1回院士会議を開催した。国府撤退後、しばらく院士の選出を行わなかったが、1957年より院士会議が再開された。しかし、これらは院士会議での選挙を経たものではなく、1958年に行われた第3回院士会議において「第2期院士」が選出された。近年では、2012年には第30回院士会議において「第29期院士」が選出されている⁶⁾。

5) 同4、p131-141。

6) 中央研究院ホームページ（院士会議）を参照されたい。（<https://dbln.sinica.edu.tw/textdb/academicians/index.php?lang=ch>）

29期院士は261人の陣容規模を持つ（生命科学88人、数理科学111人、そして人文社会科学62人）。

3. 専攻研究について

中国、台湾、香港・マカオにおいて、銭穆の学術についての専攻研究は多数ある。一方で、人物については、あまりとりあげられることはなかった。とりわけ人間関係については、中国側では、毛沢東の発言により、1990年代半ばまで、あつかわれなかった。1977年末の第11期中国共産党大会のいわゆる「三中全会」以前には、触れることさえできなかった。毛沢東が、

侵略を進めるために、帝国主義は数百万人の、旧式な文人や士大夫とは別の新式の大小の知識分子をつくった。こうした人々に対し、帝国主義と中国を裏切った反動政府は、こういった一部分の人々しかコントロールできなかった。その後、さらにその中の一部しかコントロールできなくなった。たとえば胡適や傅斯年、銭穆の類である⁷⁾

そう述べたことにより、胡適（1891-1962）、傅斯年（1896-1950）と並び、中国側では事実上、思想的タブーとされ、触れられなかった。21世紀に入ると、胡適や銭穆に対する人物の評価について、次第に言及されるようになった。かれらの人間関係や交流について詳しい論文としては、「傅斯年與銭穆の交往和分歧」『塩城師範学院学報』（人文社会科学版）第25卷第2期や「銭穆與新考拠派關係略論-以銭穆與傅斯年的交往為考察中心」『上海大学学法』（社会科学版 2007年9月）などがあり、胡適や傅斯年を中心とする当時の人文科学界において、銭穆が排除されたことのプロセスの分析とその論証を行っている。専門書としては、郭齐勇・汪学群『銭穆評伝』（南昌：百花州文芸出版社、1995年第1版）や陳勇『銭穆伝』（北京：人民出版社、2001年第1版）、汪学群、武才娃『銭穆』（昆明：雲南出版集團・雲南教育出版社、2008

7) 毛沢東「丢掉幻想，准备斗争」中国共産党中央文献編輯委員會編『毛沢東選集』1991年6月第2版、p1485。

年9月第1版）といったものがある。

一方、台湾側では、こうした錢穆と胡適や傅斯年らとのかつとうを積極的には取り上げてこなかった。その理由は、蒋介石と錢穆の関係は良好であったものの、総統府のシンクタンクとして、国家の学術の最高研究機関としての中央研究院には、胡適や傅斯年の強い影響力があったのである。本稿では、1945年以前のことについては、あつかわない。次号に紙幅をいただけるので、その時以降にもうしのべたい。

4. 香港に残留のきっかけについて

2013年1月14日付けの『大道文化副刊』B14ページ（人物）に、余斌のよる錢穆と胡適らの関係を相当踏み込んだ記事が掲載されているので、参照いただければ幸いである。「錢穆認定胡適是個社会名流,不是個讀書人」というテーマを見る限り、ようやく錢穆の周囲との人間関係が明らかになってきた感がある。

錢穆は、1949年6月、香港にやって来た。後述するところであるが、そのきっかけをつくったのが後述するところであるが、張其昀(1901-1985)である。張其昀との交流がなければ、新亜書院そのものが存在しえなかった。しかし、錢穆が台湾に来る（職を得る）こともなく、香港の雑居ビルで、中国から避難してきた知識青年の居場所を確保したいという、そういう思いだけで、様々な人を動かし、香港で教育事業に、一途に身を捧げた。

錢穆が香港中文大学新亜書院を離れる時、ある「怒り」をあらわにしていたことは、まぎれもない事実である。それは、妻の錢胡美琪がその後出版された『新亜遺鐸』の序言の中で、このように記述を残しているからである。

民国53年（1964年）7月10日、新亜（書院）は、第13期の卒業式を挙行した。賓四も式典をとりもつとともに、前項の教職員、学生に正式な離職の講演を行った。思い返すと、それはひどくいそがしく混乱した記憶である。わたしは今でもはっきり覚えている。式典の前夜、すでに夜12時を過ぎていた。賓四は雑務を終えた後、わたしに心静かに校務を

つかさどって15年以来、最後の講演の準備をすることにしようと言った。場所は、沙田和風台5号である。……次の日の朝、わたしは新亜に付き添っていき、かれは無数の屈辱に耐えていた。また、長い内心のかつとうを経ても、しずかに話をした。わずかな怒りも見せず、ひとことひとことを言情と感慨を込めて、わたしは幾度も涙をこらえることができなかった⁸⁾。

怒りの対象は、当然、当時の新亜書院を含む、香港中文大学の何かである。あるいはかれをとりまく一つ巨大な力に対する反感である。本稿では、この点については深くは触れない。しかし、『新亜書院55周年記念文集-誠明古道照顔色』にも収録された4つの点については、述べておきたい。いったい錢穆が何事に対して怒りをあらわにしていたのか、その一部を垣間見ることができる。

「新亜書院創弁簡史」の最後において、「いくつかの不正確な伝聞をはっきりさせる」として、4つの点を挙げた。一つ目は、新亜書院の設立のいきさつ、二つ目は、新亜書院設立当初において国府から受けた3000元の補助について、三つ目は、エール大学のハリー・R・ルーディン (Harry Rudin) 教授との合作に至るいきさつについて、四つ目はのアメリカ・アジア協会香港駐在のジェームス・アイビー (James Ivy) との交流の件などである⁹⁾。

一つ目は、新亜書院創設について、その発案をしたのは張其昀であり、自身の功名心のごとく言われるのは心外であると言っている。また二つ目は、国府と蒋介石は別であり、自分を助けてくれたのは蒋介石個人であって、国府を「台湾政府」と表現し、当時の国府に対する感情の複雑さを垣間見せている。三つ目と四つ目についても、事実とは異なることを、伝聞されたことに怒っているのである。

8) 錢穆『新亜遺鐸』台北：東大図書公司、1989年9月初版、p3-4。

9) 詳しくは香港新亜書院『新亜書院55周年記念文集-誠明古道照顔色』香港：香港中文大学、2006年初版、p23-25を参照されたい。

5. 錢穆の孤立について

まず、錢穆は政党に属しておらず、したがって中国国民党員ではなかった¹⁰⁾。許冠三の『新史学九十年1900-』には「史学新義」として梁啓超、張蔭麟、「攷証学派」には王国維、陳垣、「方法学派」として胡適、顧頡剛、「資料学派」として傅斯年、陳寅恪、「史観学派」として李大釗、朱謙之、常乃惠、雷海宗、郭沫若ら7人、「史建学派」として、先行諸賢、殷海光、許冠三をあげたが、錢穆の名前は挙げられなかった。筆者の許冠三が自らを史建学派として先行諸賢、殷海光にならべたこともおもしろい。中国共産党に近い郭沫若までも取り上げたにもかかわらず、錢穆の存在さえも排除したことは、興味深いことであった¹¹⁾。

錢穆は1949年1月に蒋介石が下野し、南京にあった国府が広州に移動することになる。おそらく国府は、長江を境に南を国民政府が、北を中国共産党が治めることになると考えていたが、瞬間に劣勢となり、同年秋には、再び四川省各地を転々とし、台北に撤退することとなる。こうした状況の中で、中央研究院の院士の大半は、台湾に行けなかった¹²⁾。錢穆は中央研究院・院士ではなかったが、胡適に勝るとも劣らない地位にあった。

陸玉芹は、

20世紀50年代初期、胡適は台湾中央研究院院長になったとき、錢穆の弟子、嚴耕望（1916-1996）が胡適に対し院士會議が錢穆を排除し、孤立させてはならないとの考え方を示した。その後、胡適は少数の年長の院士に相談したが、少数が依然として錢穆の院士への選出を反対したと述べている¹³⁾。

さらに、

著名な考古学家の李济は錢穆を見下していた。錢穆より年は一歳若い李济はアメリカ留学で博士学位をもっている。南開大学や清華大学、中

10) 錢穆『八十憶双親、師友雜憶（合刊）』台北：東大図書、2009年11月、第2版第1刷、p121。中国国民党入党をしない理由が記述されている。

11) 許冠三『新史学九十年1990-』（上下冊）1996年12月第1刷。

12) 馮海青「81位中研院院士留在大陸60人」『民間歷史』香港中文大学中国歴史研究センター（<http://mjlsh.usc.cuhk.edu.hk/Book.aspx?cid=11&tid=254>）

13) 陸玉芹『未学齋中香不散』広州：広東教育出版社、2007年1月第1版、p89。

中央研究院の教授や研究員であり、学術研究の中心的地位にあった。台湾にうつった後も、錢穆を見下した姿勢は変わらず、錢穆が一度エール大学で学術講演を行った時、(錢穆に対し)不遜な態度をあらわにした。その場にいた余英時もまた屈辱を受けた。1968年になって、錢穆はようやく院士となった¹⁴⁾。

それは錢穆の愛弟子である嚴耕望が、胡適に対し、錢穆を中央研究院から排除することは、すべての学術界の団結に悪影響をおよぼすものだと直接説得した。

しばらくして、中央研究院代理院長の朱家樞先生が辞職し、胡(適)先生が台湾にもどり、その任を継ぐこととなった。わたしは中央研究院とはすべての学者を網羅しなければならず、錢(穆)先生を院士から外すべきではない。別の人物が院長になられるなら話はちがうが、胡先生はうたがいもなく全国の学術界の領袖である。……わたしは勇気を出して胡先生に長い手紙を出した。……そして率直に自分の陳述はまさに錢先生の地位のために主張しているのではなく、(胡)先生の学術的地域のために主張している。国内外における(錢穆先生)の大著の名声と誉は大きな存在である。孤立すれば孤立するほど光栄である。(中央)研究院からすれば、とりわけ胡先生からすれば、これをしないわけにはいかない。これをもって胡先生の領袖としてのイメージを示してもらいたいと考えた。胡先生は深くわたしの建議に同意した。しかし、一部の有力な人士の考え方はいぜんとして変わらず、なされることはなかった¹⁵⁾。

それは新公証派を中心とする人々に露骨な排斥を受けたことは明らかである。錢穆が台湾に行けたのは、胡適の死去、そして文化大革命が中国全土を揺るがした時代、それに対抗して中華文化復興運動を展開したことに理由がある。

14) 同13、p89-90。

15) 嚴耕望『錢穆賓四先生與我』台北：台湾商務印書館、2008年2版1印刷、p65。

2013年12月 于蕙清・潘江東・紙矢健治：錢穆の香港残留について（1949-1967年）

台湾にあった国府が、中国のプロレタリア独裁を基礎とする文化大革命に対し、中国の伝統文化を復活させる運動を展開したのであるが、胡適はすでになく、それに代わる精神的、中心的役割を果たせる文人が必要になったことが背景にあって、1967年になって、ようやく錢穆が台湾赴く環境が整った。

6. 香港新亞書院設立のいきさつ

香港と広東省宝安区の間の「羅湖口岸」は、1949年10月の中華人民共和国の成立以降において、香港側の出入国管理が始まった。国府と英国は同盟関係にあって、それまで、羅湖側からの香港入境は、原則的には自由であった。1945年8月の終戦後、香港政庁による統治が再開されると香港の人口は120万人から250万人へ激増した¹⁶⁾。日本の統治とともに中国側に避難した人々、国府の敗北などで避難する人々などで急激な増加（回復）を見たが、その人口規模に対し、大学教育は香港大学のみであり、そもそも英国の大学として設立されたために、中華文化の教育はないに等しかった。

錢穆が香港に移動するきっかけをつくったのは、張其昀である。かれは国府が中国大陸にあった時代、著名な地理学の研究者としての名声があり、蔣介石の人望も厚く、学術経験も豊富な人物であった。張其昀は国府が中国側であった時代、国立浙江大学文学院院长などをつとめ、国府が台湾に渡ってからは教育部長（大臣職）などを経て、中国文化学院を1962年に設立した。

錢穆が香港へ行こうと考えたのは、張其昀より香港での新大学の創設をもちかけられたからである。実際にはそもそも広州へ向かう動機は、錢穆自身の説明によれば「1949年春、余は江南大学の同僚であった唐君毅とともに、広州にあった私立華僑大学の招聘を受けて、上海から広州へ向かった」¹⁷⁾のであって、香港に赴くことなど、錢穆自身想像もできなかったのではないだろうか。同僚で、著名な史学者である唐君毅の日記によれば、「1月22日、晴れ。今日蔣（介石）総統が下野し、政府は依然として戦闘に備えている。1949年

16) 胡春惠『香港調景嶺營の誕生與消失』台北：国史館、1997年12月初版、p11。

17) 香港新亞書院『新亞書院55周年記念文集-誠明古道照顔色』香港：香港中文大学、2006年初版、p3。

4月7日、金剛輪に乗り広州に赴く。」¹⁸⁾とある。広州に向かう時点では、その後、香港へ向かい書院をつくることなど考えたことはなかったということである。唐君毅によれば、蒋介石の下野（1949年1月22日）をはさんで、1月19日、30日、2月5日、17日、3月1日に王淑陶に手紙を出す。3月26日、授業を終え、「夜、政治問題を思う」¹⁹⁾との記述をした翌日、王淑陶に「電報」を打った。この時、広州へ赴く決心をしたと考えられる。4月1日、荷物の整理をし、2日に汽車に乗るために駅に行ったものの、汽車が来ず、帰宅し、4日に「妹と錢（穆）先生、黃姉とともに上海へ赴く」。そして7日に錢（穆）先生とともに金剛輪に乗り広州へ向った」。

広州では「(牟)宗三が台湾に赴く」²⁰⁾ことを聞くなど、次第に戦局が悪化することを肌で感じていたに違いない。閻錫山や国民党などの要人のまねきを受け、茶会に行ったりしているが、蒋介石が下野した国府に対して、決して良い印象を持っていたとは思えない。

錢穆によれば、

ある日、街で旧友の張曉峰に偶然出会う。かれは杭州浙江大学から来た。香港で学校を創設するつもりだという。すでに謝幼偉、崔書琴などと約束しているとのこと。また（かれらも）やがてやって来るそうだ。これら二人とは面識はそれほどない。また（それ以外に）経済学を治めているものがあるそうだ。その者とは面識はない。その者は、名前も忘れたが、曉峰は余に（学校の設立に）参加しないかと言う。……この時、広州に来てからのことは、それから先のことは決めていなかったが、この時、ついていくことを決意した。この日の一言（いちげん）で決まった。曉峰はまた、近く董事会を行い、教育部に立案（認可登録）を申請する。決まったら連絡するという²¹⁾。

曉峰こそ、張其昀である。錢穆が香港に至るきっかけをつくったのは、ま

18) 唐君毅『唐君毅全集卷27 日記（上）』台北：学生書局、1988年7月初版、p29。

19) 同18、p23-29。

20) 同18、p33。

21) 同10、p255。

さに張其昀である。

7. まとめにかえて

錢穆は文化大革命のさなか、1967年10月、台湾へ赴くことになる。蒋介石が外双溪の建物を手配し、そこに落ち着いた。錢穆を香港へいざなった張其昀が1962年に創設した中国文化学院（現、中国文化大学）歴史系にまねかれた。故宫博物院の特聘研究院にもまねかれ、同研究院に研究室をもった。1968年には、中央研究院第6期院士に選ばれ、ようやく、その学識経験にふさわしい処遇を受ける。胡適や傅斯年らとの関係がわるくなったことが、錢穆を香港にとどめおく原因になったことは、まぎれもない事実である。筆者は、この事実を学術自由の名のもとに、明確にしておく必要があった。ただ、陳勇が述べているように、錢穆と顧頡剛の関係について「和して同せず」と表現しているように、文人としてふさわしい態度をとったことはまちがいない。その態度は、学術自由の気風の中で、胡適や傅斯年との間においても同様であった。香港にとどまり、新しい学校をつくり、数多くの人材を輩出した錢穆は、決してその時代の権力に、けっしてこびることなく、ひたむきな教育家としての一時代を築き上げた。今日の香港中文大学を建設した錢穆を香港に向かわせたのは、張其昀その人であり、台湾に移った錢穆をその地位にふさわしい処遇を最初にしたのも張其昀であった。

参考文献

- 教育部編印『公私立大学校院一覽表』台北：教育部、1991年初版。
許冠三『新史学九十年1990-』（上下冊）1996年12月第1刷。
嚴耕望『錢穆賓四先生與我』台北：台湾商務印書館、2008年2版1印刷。
胡春惠『香港調景嶺營的誕生與消失』台北：国史館、1997年12月初版。
錢穆『新亞遺鐸』台北：東大圖書公司、1989年9月初版
錢穆『八十憶双親、師友雜憶（合刊）』台北：東大圖書、2009年11月、第2版第1刷。
中国共産党中央文献編輯委員會編『毛沢東選集』1991年6月第2版。
唐君毅『唐君毅全集卷27 日記（上）』台北：学生書局、1988年7月初版。
香港新亞書院『新亞書院55周年記念文集-誠明古道照顔色』香港：香港中文大学、2006年初版
陸玉芹『未学齊中香不散』広州：広東教育出版社、2007年1月第1版。

ホームページ

中央研究院

(<https://dbln.sinica.edu.tw/textdb/academicians/index.php?lang=ch>)

中華人民共和國香港特別行政區政府

(<http://www.edb.gov.hk/>)

香港中文大學中國歷史研究センター

(<http://mjsh.usc.cuhk.edu.hk/Book.aspx?cid=11&tid=254>)

The Times Higher Education World University Rankings

<http://www.timeshighereducation.co.uk/world-university-rankings/2013-14/world-ranking>

筆者

于蕙清（正修科技大學通識教育中心專任教授）

潘江東（國立高雄餐旅大學副校長）

紙矢健治（德山大學經濟學部教授）